高千穂の夜神楽ミニ解説

◎高山を通りて行けば面白し　いつも絶えせぬ御神楽の音

秋の収穫も終わり、祖母山頂が樹氷で覆われ始める頃、神話と伝説のまち高千穂では、氏神様のお祭りが始まります。高千穂の村祭りは収穫感謝祭としての秋祭り、太陽復活・鎮魂儀礼としての冬祭り、五穀豊穣祈念余祝の春祭りとして、氏神様を神楽宿と呼ばれる里の家にお招きし、夜を徹して 33 番の神楽を奉納するのが昔からのシキタリです。ただ、近年は舞人や村役目の都合で夜神楽が奉納出来ない集落もあり、そうした集落は日神楽と称して、お昼に式３番と呼ばれる神楽を中心に数番奉納しています。

◎祭場のしつらえ

例祭日の当日、お昼過ぎに氏神社で神迎えの神事が行われた後、お神輿の行列が村中をねり、神楽宿へと向かいます。村道には神の道として道注連（みちじめ）が張られ、道行神楽が行われます。祭場の神楽宿には、その象徴として屋根に弓矢と山冠・立冠・横冠の 3 本の御幣（ごへい）が棟飾りとして設けられ、竹の器に神酒を注いだ「かけぐり」を供えます。庭には「山」と呼ばれる一間四方の外注連が設けられ、神楽が舞われる神楽宿の中央の部屋（おもて）には二間四方の内注連「神庭（こうにわ）」がつくられます。「山」は山の神で、自然の象徴として 33 天や 28 宿、24 神、12ヶ月12神等の飾り物が配されます。神々は天に近い「山」に降臨して、注連を伝わり「神庭」に舞降りるという古来の神事形態の中で神楽は奉納されます。内注連の「神庭」は神前を東と定め、太鼓の座が南、外注連の方が西で「幣の上」と称します。東の神座には皇大神宮の「筥宮（はこみや）」を中心に神面（おもて様）を置き、神酒や米・野菜・餅等の神饌が供えられます。二間四間の四隅には竹と榊を立て、注連縄と「彫り物（えりもの）」が飾られ、天井の中央には高天原を象徴する「雲（天蓋）」が吊られます。「彫り物」は中央の鳥居、子授安産豊穣の「湯襷（ゆだすき）」、自然界の中央の土徳神、四方の木・火・金・水徳神、十干十二支等の切り絵が配され、神仏習合の陰陽五行の影響がみられます。高千穂の注連縄は七五三で編まれ、天神七代・地神五代・日向三代を意味しています。祭場そのものに自然界の神々と里人の生活との絆が表現され、その結界の中で一年に一度、山間で生きる高千穂の里人は神々と神遊びを行うのです。

◎夜神楽 33 番

神楽の舞手は奉仕者という意味から「ほしゃどん」と呼ばれます。33 番は、観音様は 33 の仮身により人々を救うという思想によるものといわれます。神面は「おもて様」と称され、神そのものです。神面の起こりは人にあらざる神の表現といわれますが、33 番の中では岩戸５番をはじめ、杉登の入鬼神（いりきじん）、地割、山森、五穀、七貴神、八鉢（やつばち）、御神体、御柴（おんしば）等の舞で「おもて様」を拝した神楽が舞われます。「面神楽」は神話にちなんだ劇的な舞で、「面様」をつけない舞は「素面（すおもて）舞」といわれ、清祓い・鎮魂・豊穣祈願・子授安産等の願神楽として奉納されます。神楽歌はそれぞれの舞に応じた歌や舞の進行、所作の区切りとして歌われます。「四方念じて」「吹けば行く」「中央六部に」は四方や中央、太鼓割りに移る時の歌で、一つの採物手が終わると「舞いおろす中のや正面」が歌われ、「八雲立つ出雲八重垣」（地区によっては「収めても千代の御神楽」）で舞は終了します。高千穂の神楽は「採物（とりもの）神楽」ともいわれ、何を持って舞うかで、その神楽の願い、性格が表わされています。鈴の音は神の「のりごと」であり、榊・御幣は神の依代（よりしろ）、杖は荒神様の持物で、神威であり、また耕作棒・測地の尺棒・山人の贈物として使われます。弓矢は悪魔祓いの採物で、太刀は水徳神の呪物として使われます。「地固」「岩潜」「山森」等は太刀を用いる水神系の神楽ですが、併せて女性の帯を襷に用いることから子授安産の祈願も含まれています。水徳の力による大地穀物の豊穣・育成と、子孫の誕生による村の繁栄の願いが込められています。扇は神儀儀礼の呪具で、扇の手は初めは閉めたままで舞い、次に開いて舞う「開き扇」の手に移ります。これは力の展開を意味すると言われます。

◎旅人も一夜氏子

観光で見学に来られたお客様も一夜氏子です。村祭りは総指揮の「元締め」を中心に「中世話」「神使われ」「注連の番」「台所役」等、里人の祭役目で運営されます。どうか村々のシキタリをお守りいただき神々・里人とともに神遊びをお楽しみください！

国指定重要無形民俗文化財 高千穂の夜神楽 の概略

高千穂地方に伝承されている神楽は、天照大神が天岩戸に隠れられた折に岩戸の前で天鈿女命が調子面白く舞ったのが始まりと伝えられ、古来私共の祖先は永い間高千穂宮を中心にこの神楽を伝承して、今日に及んでおります。毎年 11 月中旬から翌年 2 月にかけて各集落で、三十三番の夜神楽を奉納し、秋の実りに対する感謝と翌年の豊穣を祈願するものであります。

神楽の順序は、行われる地域によって違っています。

番	名	命づけ	説明
1	ひこ まい 彦 舞	さるたひこのみこと 猿田彦命	一斗枡にのぼり四方拝する。七番までをよど七番といい、普通にはこの七番で願、成就とする。
2	たい どの 太 殿	くぐのちのみこと　かぐつちのみこと　かなやまひこのみこと　みつほのめのみこと 句句廼智命(木)・軻遇突智命(火)・金山彦命(金)・罔象女命	天孫降臨のとき、注連を張って高天原と定め、ここに八百万神を招く舞。
3	かみおろし 神 降	かむろぎのみこと　あめのおしほみみのみこと 神漏伎命　・おんしおの命　・天忍穂耳命	降神の舞で神を招く。以下三番を式三番といい、一番重要で祭典では必ず舞う。
4	ちん じゅ 鎮 守	おおやつひめのみこと　つまづひめのみこと 大屋津姫命　・柧津姫命	土地を祓い固め、神を鎮めまつる。
5	すぎのぼり 杉 登	しいねつひこ　うさつひこ　たけみかづちのかみ 椎根津彦　・莵狭津彦　・入鬼神ー武甕槌神	昇神の舞。神を送る。
6	ぢ がため 地 固	ことしろぬしのかみ　いそたけるのみこと　たまのやのみこと 道のたんの命　・事代主神　・五十猛命　・玉屋命	剣、即ち水の徳で耕地を潤して国造りをする。宝渡しは護符の剣を氏子代表又は宿主に渡す式。
7	ひ かんぜ 幣神添	ひこさちのかみ　あめのひのみこと 彦狭知神　・天日命	幣による祓いの舞、願神楽。折敷に神歌あり。
8	ぶ ち 武 智	おとたちばなひめ　そとおりひめ 弟橘姫　・衣通姫	むちかむしとも言う。戦い準備の舞。
9	た ち かんぜ 太刀神添	おおやつひめのみこと　つまづひめのみこと 大屋津姫命　・柧津姫命	太刀の神威により厄難を払う舞。ハレワイサのサアという舞手の掛け声が入る。岩潜りと共に神添の本体、全国に見られる。
10	ゆみしょうご 弓正護	つきよみのみこと　あまのひわしのみこと　ふつぬしのかみ　たけみかづちのかみ 月夜見命　・天日鷲命　・経津主神　・武甕槌神	弓を持ち悪魔を払う舞。宝渡しは弓矢を氏子（村人）に渡す式。
11	おき へ 沖 逢	あまのむらくものみこと　おもいかねのかみ　たおきはおいのみこと　あまのほひのみこと 天村雲命　・思兼神　・事代主神　・天穂日命	水神を祭る火伏せの神楽。天真名井の水を下すという。吹けば行く吹かねば行かぬの歌が入る。
12	いわ くぐり 岩 潜	たけみかづちのかみ　あまのまひとつのみこと　たおきほおいのみこと　さるたひこのみこと 武甕槌神　・天目一箇命　・手置帆負命　・猿田彦命	剣の舞、白刃を持ち回転などする。安産を祈る女子が帯をたすきにしてもらう。
13	ぢ わり 地 割	すさのおのみこと　あまのこやねのみこと　ふとだまのみこと 荒神ー素戔嗚命　・神主ー天児屋命　・幣挿ー太玉命 つくよみのみこと　たけみかづちのかみ 弓舞ー月夜見命　・太刀舞ー武甕槌神	かまど祭で重要な舞。屋敷祭をする。神主と問答あり。
14	やま もり 山 森	しょうりゅうおうのみこと　しゃくりゅうおうのみこと　びゃくりゅうおうのみこと 青龍王命　・赤龍王命　・白龍王命 こくりゅうおうのみこと　おうりゅうおうのみこと 黒龍王命　・山の神ー黄龍王命	最も素朴な舞。山の神と二頭の獅子が出る。この後、獅子は門付に出て戸毎を祝福する。
15	そで ばな 袖 花	あめのうずめのみこと　つまずひめのみこと　いしこりどめのみこと　このはなさくやひめ 天鈿女命　・柧津姫命　・石凝姥命　・木花開耶姫	鈿女命が天照大神のお使いにて猿田彦神をお迎えに行かれる舞。
16	ほん ばな 本 花	あめのうずめのみこと　つまずひめのみこと　いしこりどめのみこと　このはなさくやひめ 天鈿女命　・柧津姫命　・石凝姥命　・木花開耶姫	膳には米と榊をのせる。米の収穫を祝い又豊作を祈る。
17	ご こく 五 穀	うがのみたまのみこと　うけもちのかみ　おおたのみこと　おおあなむちみこと 倉稲魂命　・保食神　・大田命　・大己貴命 おおみやのめのみこと 大宮売命	穀種を祭る。各々膳に穀をのせ持って舞う。後之をまいて村人が拾い帰る。米、粟、大豆、小豆、稗。
18	しちきじん 七貴神	おおくにぬしのみこと 大国主命　・御子神７人	農神の舞。姿も十二ヵ月を表すぼんでんを負う親神は六尺の杖を持つ。
19	やつ ばち 八つ鉢	すくなひこなのみこと 少彦名命	八揆とも書く。少彦名命が太鼓に乗って身軽な舞をする。
20	ごしんたい 御神体	いざなぎのみこと　いざなみのみこと 伊奘諾尊　・伊奘再尊	酒こしの舞という。酒をつくる様によせてかまけわざをし、見物人の中にも入ってくる。
21	すみ よし 住 吉	住吉神　・八幡神　・春日神　・白鬚神	海神の舞。稲荷神楽ともいう。最初から歌が入る。
22	いせかぐら 伊勢神楽	あまのこやねのみこと 天児屋命	七段しばりの大幣を持ち舞う。岩戸を探る舞で岩戸開きの準備である。
23	しば ひき 柴 引	あまのかごやまのみこと 天香語山命	天香具山の柴を引き岩戸の前に飾る。これから岩戸五番、伊勢神楽と日前又は大神を加え岩戸七番という。
24	たぢからお 手力雄	たぢからおのみこと 手力雄命	天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところ。鈿女と入れ替わる。
25	うず め 鈿 女	あめのうずめのみこと 天鈿女命	天岩戸の前の舞。神楽の起源といわれる。
26	と とり 戸 取	ととりみょうじん　（たじからおのみこと） 戸取明神　（手力雄命）	天岩戸を開き、天照大神に再び出て頂く。これで又世の中が明るくなった。
27	まい ひらき 舞 開	たぢからおのみこと 手力雄命	ついに天岩戸を開き天照大神に出て頂いたので鏡を両手に持って喜び祝い舞う。
28	ひ まえ 日の前	あまのこやねのみこと　さるたひこのみこと　おもいかねのみこと　あめのうずめのみこと 天児屋命　・猿田彦命　・思兼命　・天鈿女命	外注連を祭り、天照大神の出御を祝福する。神送りの舞。麻のついた大幣をもつ。高千穂神楽特有の舞。
29	だい じん 大 神	やふさのはちろうはいたかてんじん　いせのみこと 矢房八郎拝鷹天神　・道のたんの命　・伊勢命	大わだつみの神（海の幸）の清めの舞。願掛け、願ほどきの神楽。
30	おん しば 御 柴	ににぎのみこと　あまのむらくものみこと　あまのほひのみこと 瓊瓊杵命　・天村雲命　・神主ー天穂日命 （一般には十社大明神と所の氏神という）	神人一体の古風を最もよく象徴する。二神柴に乗り村人多数に担がれて外注連を廻り神庭に入って神主と問答あり。
31	しめぐち 注連口	たぢからおのみこと 手力雄命	神送りをするところ。四人はみどりの糸をとって注連の前で舞う。舞いおろす中のヤ、正面舞い下ろすヤ、今は正面おさめましますの歌あり。
32	くりおろし 繰下し	あまのこやねのみこと　あまのひわしのみこと　あまのむらくものみこと　あまのほおいののみこと 天児屋命　・天日鷲命　・天村雲命　・天帆負命	雲下ろしの用意。雲綱をとり外注連に向かって舞う。
33	くもおろし 雲下し	かむろみのみこと　たおきほおいのみこと　あまのこやねのみこと　おもいかねのみこと 神漏美命　・手置帆負命　・天児屋命　・思兼命 ふとたまのみこと 太玉命　（あるいは八百万神ともいう）	雲を下ろす舞。紙吹雪が舞い散ってみごとな三十三番の大成就。